



ゲートウェイとしての「二人称」の科学

——武藤論文へのリプライ——

三田村 仰

(立命館大学総合心理学部)

“Second-Person” Science as a Gateway to Behavior Analysis:
A Reply to Muto (2017)

MITAMURA Takashi

(College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University)

The present article was a reply to Muto (2017). In this article, the concept of the “Second-Person” science (Muto, 2013, 2017) was interplayed as a gateway to behavioral analysis wherein people from various orientations discuss behavior analysis. The present article also pointed out a useful feature of good balance between attracting and distancing from other science on human service approaches in the concept of the “Second-Person” science.

本稿は、武藤（2017）へのリプライ論文である。本稿では、武藤（2013, 2017）で提唱された「二人称」の科学は、多様なオリエンテーションの論者が、行動分析学について議論するうえでのゲートウェイになると解釈した。また、「二人称」の科学は、さまざまな対人援助のアプローチを引きつけると同時に、適切なところまでで押し戻すという優れた特徴をもつことを考察した。

Key Words : “Second-Person” Science, Behavior Analysis

キーワード : 「二人称」の科学, 行動分析学

まず最初に、僭越ながらリプライの機会をいただいたことに感謝したい。

著者が理解した武藤論文の主旨

私の理解した武藤論文（武藤, 2013, 2017）の大きな主張は、ごく簡単に言えば「行動分析学（臨床行動分析学）は、一人称の科学とイコールではないし、三人称の科学とイコールでもない」ということである。もちろん、その他にも興味深い議論がなされているが、今回の武藤論文（武藤, 2017）はこの主張（武藤, 2013）に関して十分な論理武装するためのものと理解できる。

本リプライの目的

武藤（2013）で提唱された「二人称」の科学とは、Gendlin & Johnson（2004）の提唱する「一人称」と「三人称」のアプローチに対する第3の勢力として創造されたものである。一般的に人は両極端を主張されると、その落とし所としての中庸を求める傾向があるように思われる。そうであるならば、読者が「一人称」と「三人称」のアプローチに限界を感じたとき、「二人称」の科学という名称は2つの命題を止揚する魅力的な存在と映るだろう。そして次の段階として、「正当な『二人称』の科学とは何か？」という議論が生まれると予想される。実は、それこそが武藤論文の目的もしくは意義なのではないかと私は考えた。

私は、武藤論文における「二人称」の科学の定義についても、また行動分析学が二人称の科学であるという主張についても同意する立場である（三田村, 2015）。同時に、私個人としては「正当な二人称の科学が何であるか？」という議論の行方についてはそれほど重視していない。実際のところ、その結論自体が私の行動分析家としての実践や研究に直接的に影響を与えることはないように思うからである。注)

注) あえて、議論に参戦するならば行動分析学の科学哲学における込み入った背景を持ち出すこともできるかもしれないが（丹野・坂上, 2011）、すでに他の武藤論文（e.g., 武藤, 2001, 2011）において哲学的な背景は十分に検討されているといえるだろう。

むしろ、私が武藤論文に意義を感じる点は、「二人称」の科学という名称が、これまでしばしば断絶されてきたさまざまなアプローチの間に強力なゲートウェイ（異文化・異世界と交流するための玄関口）を創造しうることである。本リプライでは、行動分析学が「二人称」の科学を主張することの意義、そして、そのゲートウェイの役割について考察したい。

ゲートウェイとしての「二人称」の科学

武藤論文において「二人称」の科学として挙げられた行動分析学は徹底的行動主義という認識論によって支えられている。そして、この徹底的行動主義は、歴史上、驚くほどに誤解を受け続けてきた（O'Donohue & Ferguson, 2001; 佐藤, 1985）。ほとんどの誤解は Watson (1913) の（方法論的）行動主義との混同である。この発端は、高明な言語学者である Noam Chomsky (1959) がこれら二つの行動主義を区別できずに、ひとまとめにしたうえでスキナーの書物を批判したことにあると言われる。

行動分析学の哲学に誤解をもつ読者であれば、行動分析学が「二人称」の科学だという主張に「自分が知っている行動主義と違う」と驚くだろう。だからといって、これを機に、読者が「行動分析学」と

いう学問について、より深く学び始めるとは、歴史的にみても考えにくい。ところが、「二人称」の科学についてはどうだろう。おそらく、「二人称」の科学という言葉の響きは、他のオリエンテーションの論者をも惹きつけるものと期待される。そして、他のオリエンテーションの論者は実際に「二人称の科学とは何か？」といった議論に参加することで、必然的に行動分析学に触れることになるだろう。つまり、「二人称」の科学とは、行動分析学について論者を惹き込むためのゲートウェイになると考えられる。この議論に参加しようとすることでゲートウェイは開かれる仕組みになっている。

「引きつけ」ながら「押し戻す」絶妙なバランス

行動分析学へのゲートウェイを創り出す試みには、すでに「ACT」「第3世代の行動療法」「マインドフルネス」といった様々な概念もしくはキャッチコピーがあり、こうしたカテゴライズやネーミングはもちろんいくらかでも創り出すことが可能である。その中でも「二人称」の科学がユニークなところは、単に引きつけるだけでなく、ぎりぎりのラインで押し戻すことが可能な点にあるだろう。

武藤論文では「二人称」の科学という名称を使うことで、行動分析学と「一人称」の科学（e.g., 体験的心理療法）、そして「二人称」の科学（e.g., 従来の認知行動療法）とをある意味では「同じ」と言って引きつけ、同時にある意味では「違う」と言って押し戻す。

従来の認知行動療法との関係について言えば、行動分析学と認知行動療法は実証性を重視するという類似点があることがよく知られている。その一方で「二人称」の科学は「過程」「再帰的」とあるという相違を浮き彫りにすることで一定以上の接近を押し戻している。また、体験的心理療法との関連について言えば、近年、マインドフルネスが流行してきたことで、明らかに毛色の異なるグループ（それは時に心理療法や宗教である）と ACT（行動分析学）がボーダーレスな関係にあると受け取られることが懸念される。しかし、「二人称」の科学は「他者」に位置付けられるという点で、一見ただけの共通

点からの接近を押し戻すことができる。

まとめ

「二人称」の科学は、さまざまなオリエンテーションの論者が意見をかわしあうための有用なきっかけを提供すると考えられる。特にこれまで正しく理解されることの少なかった行動分析学について、「二人称」の科学というテーマで議論が深められることには、学問的にも効果的な対人援助の実施や普及の上でも大変意義がある。多様なオリエンテーションの論者との議論によって、対人援助学の可能性が益々開かれていくことが期待される。

引用文献

Chomsky, N. (1959). Review of B. F. Skinner's Verbal behavior. *Language*, 35, 26-58.
Gendlin, E. T., & Johnson, D. H. (2004). Proposal for an international group for a first person science. The Focusing Institute website:

http://www.focusing.org/gendlin_johnson_iscience.html.
三田村仰 (2015). わが国の心理学的実践の課題: 「エビデンスに基づく実践」をどのように活かせるか. 関西福祉科学大学心理・教育センター紀要, 13, 32-42.
武藤崇 (2001). 行動分析学と「質的分析」(現状の課題). 立命館人間科学研究, 2, 33-42.
武藤 崇 (2011). 機能的文脈主義とは何か. 武藤 崇 (編) ACT (アクセプタンス&コミットメント・セラピー) ハンドブック: 臨床行動分析におけるマインドフルなアプローチ. 星和書店, pp. 3-18.
武藤崇 (2013). 臨床行動分析と ACT—「二人称」の科学とその実際. 臨床心理学, 13 (2), 202-205.
O'Donohue, W., & Ferguson, K. E. (2001). The Psychology of B. F. Skinner. Sage Publications. 佐久間徹 (監訳) 2005 スキナーの心理学: 応用行動分析学 (ABA) の誕生. 二瓶社.
佐藤方哉 (1985). 行動心理学は徹底的行動主義に徹底している. 理想, 62, 124-135.
丹野貴行・坂上貴之 (2011). 行動分析学における微視-巨視論争の整理: 強化の原理, 分析レベル, 行動主義への分類. 行動分析学研究, 25 (2), 109-126.
Watson, J. B. (1913). Psychology as the behaviorist views it. *Psychological Review*, 20 (2), 158-177.

(2016. 11. 18 受理)
(ホームページ掲載 2017年5月)